「安曇族と金印」

（財）柿原科学技術研究財団監事　　亀山　勝

＜安曇族探索の動機＞

私が知っている現在の漁業者に照らして、阿曇連が海人（あま）を引きつれて現在の長野県安曇野市に入って農耕民になったという「海人の陸上がり」説に疑問を感じ、全国のアヅミとシカの地名の地を訪ねたのが事の始まり。

＜安曇族と活動軌跡＞

中国春秋時代の呉は、長江河口南域（浙江省周辺域）に
勢力圏をもち、海人を主体に船を使った航海や戦闘を得意としていた。BC482 年には中国大陸の覇者となったが、BC473 年に、越に亡ぼされて、北部九州へ渡って来た。彼らの中で志賀島を根拠地に活動し、弥生時代の基礎を築いたのが安曇族。

安曇族は、越に対する復讐心をエネルギー源として、情報収集と軍資金確保を目的に、海人が得意とする漁撈・操船・航海術を駆使して、志賀島と中国大陸の航路を開発し、交易を始めた。主な行先は、斉の国の琅邪（山東半島の青島の南西）で、商業立国だった斉の商人から交易のノウハウを学んだ。と同時に、斉商人を仲間に入れた可能性もある（博多商人の元祖？）。一方、取扱量をより多くするため、日本列島でも交易を始めた。河川を伝って内陸部にも入り、営業域を広げ、それだけ情報量も増やしていった。

BC334 年に、仇敵の越が楚に滅ぼされ、安曇族は所期の目的を失うが、交易で身に着けた商人として発展し、中国の国乱を逃れて日本列島への移住を望む人たちを支援する。

水田稲作農耕民には、貧弱な農耕具でも開拓できる湧水が豊かな内陸部の初期水田適地への入植を世話した。それらの地の中にアヅミの地名が残る。安曇野もその一つ。また、徐福が率いる金属器・養蚕・機織・造船・陶工などの技術者集団を招き、先進技術を導入した。弥生時代の産業革命である。その後、日本列島は、豊葦原瑞穂の国・ものづくり・貿易立国へと発展し今日に到る。架橋工事で言うパイロットロープ役の功績を果たした。

安曇族探索が、ここまで進むと、もはや「海人の陸上がり」の是非レベルでなく、日本の歴史の根幹を知り、将来の針路を見据えるために大切な課題に思えてきた。

＜金印の出土位置＞

志賀島から出土した金印は偽物だ、と疑問視する向きもあるが、たとえ偽物であっても安曇族の活動実績が揺らぐことはない。だが、この疑いを晴らせば、安曇族の活動内容がより明らかになる。だから、金印出土の物的証拠を探し出して立証する価値はある。探し方としては、隠す側の視点に立つことを勧める。私が試みた証拠探索の方法を例示する。

……

上記事項を、海・風・食糧・思考力といった、古代から現代まで変わらない条件、考古学の知見など多岐わたる史資料を基にして、上記事項の根拠を示しながら説明する。